様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２３６９

研究課題名（和文）ニットー、ナショナル、日蓄オリエント各社のディスコグラフィ作成

研究課題名（英文）Creating discography for Nitto Records,National Records,and Orient Records,

研究代表者
大西　秀紀（ONISHI, HIDENORI）

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：６０４６９１１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：当該研究より得られた成果は次の2点である。
現在入手・閲覧可能なレコード関連資料や実物のレコード盤の情報から、ニットーレコード、ナショナルレコード、日蓄オリエントレコード（日本蓄音器商会と合併後に製造されたオリエントレコード）の網羅的なディスコグラフィを作成した。またそれに併せて上記三社に関する簡単な社史をまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年研究領域のさまざまな分野で、音声資料への関心が高まっている。しかし我が国で発売されたSPレコードの全貌は明らかになっていない。同時にレコード史研究についても目新しい進展は見られない。音声資料を諸研究に供するには、明らかに基礎資料が不足しているのが現状である。
当該研究の成果である3種類のディスコグラフィによって、大正-戦前昭和期に関西系レーベルで作られたレコードの内容がかなり網羅的に明らかにできた。これらが研究領域の基礎資料として供与される意義は大きいといえる。

研究成果の概要（英文）：The result provided than the study concerned is two points of the next.
I made the comprehensive discography for Nitto Records,National Records,and Orient Records(which made after merger with Nipponophon company).And I edited the brief history of each companies.

研究分野：近代芸能史、日本レコード史

キーワード：大衆芸能　SPレコード　78rpm　シェラック　ニットーレコード　ナショナルレコード　オリエントレコード

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年研究領域において音声資料に対する関心が高まり、芸能研究のみならず近代の日本文化を論じる切り口や裏付けとしても、多くの歴史的録音を含むＳＰレコードが取り上げられる機会が増えている。しかしレコードに関する文献は限られており、過去に国内で発売された数万種類といわれているＳＰレコードに関する書誌的データも、整備されているとは言い難い状況である。報告者はこの現状を鑑みて、「東洋蓄音器（オリエントレコード）の社史調査とディスコグラフィの作成（H24～H27)、基盤研究(C)　課題番号：24520168」において、大正 2－8 年のオリエントレコードの網羅的なディスコグラフィ（音盤目録）を作成した。当該研究はその延長上にある。

２．研究の目的

ニットーレコード、ナショナルレコード、オリエントレコードという、大正・昭和初期の関西系大手三社に関する網羅的なディスコグラフィを作成し、新たな基礎データを研究領域に供することを目的とした。

３．研究の方法

ディスコグラフィを作成するには、レコードに関するデータが必要である。当該研究ではまずレコード各社が発行した月報･総目録(「ナショナルレコード総目録」「オリエントレコード月報」「オリエントレコード総目録」「コロムビアレコード、オリエントレコード月報」「ニットータイムス」「ニットー総目録」等）に掲載された情報を集めた。ただこれらの資料を網羅することは現実的には不可能なため、新聞・雑誌広告等からも発売情報を抽出した（「日出（京都日出）新聞」「大阪朝日新聞（京都附録を含む)」「大阪毎日新聞（京都附録を含む)」「蓄音器世界」(月刊誌)「音楽と蓄音機」(月刊誌)「蓄音機と音楽」(月刊誌)「蓄音機時報」(月刊誌）等)。

これらに加えて、SP レコードの所蔵機関発行の目録（「音盤目録」(東京文化財研究所)「SP レコード 60,000 曲総目録」(昭和館)「森・繁レコードコレクション目録」等）や、「演芸資料選書４ 演芸レコード発売目録」(国立劇場)「落語レコード八十年史」(国書刊行会)等も参考にした。また実物の SP レコードや、インターネットオークションの出品情報などからもデータを得た。

これらの情報を Excel に入力し表にまとめた上で、発売時期の情報も可能な限り付け加えた。

４．研究成果

（１）　白熊印ナショナルレコード

白熊印ナショナルレコードは大阪蓄音機株式会社（以下大蓄）のレーベルである。同社は大正元(1912)年 10 月に設立された大阪府下で初めての正規盤（自社制作のレコード）を製造するレコード会社だが、我が国のレコード黎明期によく見られるように、同社の歴史も複写盤（他社の製品をコピーした海賊盤）製造から始まったといえる。雑誌『蓄音器世界　第 5 巻 6 月号』(蓄音器世界社、1918）の表紙掲載の「蓄音器音譜曲種（原盤）百分率表」によれば（図１)、白熊印は「明治四拾弐年ヨリ製造」とある。これは我が国最初の正規盤メーカーである日米蓄音機製造（後の日本蓄音器商会）の第一回発売の年でもあり、日本のレコード史上非常に早い時期から活動していたことが分かる。大蓄設立時の登記情報は次の通りである。

図１「蓄音器世界」表紙
（京都市立芸術大学蔵）

●株式会社設立○商号大阪蓄音機株式会社○本店大阪市南区長堀橋筋二丁目二十番地○目的蓄音機音譜盤及附属品ノ製造販売○設立大正元年十月一日○資本ノ総額金拾万円○一株ノ金額金壱百円○各株ニ付キ払込ミタル株金額金弐拾五円○公告ヲ為ス方法所轄区裁判所ノ公告スル新聞紙一種ニ掲載ス○存立設立ノ日ヨリ満参拾ヶ年○取締役ノ氏名住所大阪市北区東野田町百五番地樫尾長右衛門同所樫尾慶三福井県今立郡北日野村西谷第拾九号弐拾番地牧野久米造○監査役ノ氏名住所大阪市北区東野田町百五番地樫尾祐治福井県今立郡国高村馬上兎第二号第弐号五番地佐々木貞吉　（「商業登記公告」『大阪朝日新聞』朝刊、大正元(1912)年 10 月 11 日、p.12）

「第 4 版 人事興信録（上）」（人事興信所、1915）によれば、取締役の樫尾長右衛門（1877-?）は福井県の大地主・樫尾長右衛門の長男で前名は繁治。明治 38(1905)年に家督を相続し、当主の名である長右衛門を襲いだ。慶応義塾大学理財科を卒業後大阪商船(株)に就職したが、後に地元へ戻り、大蓄設立時は家業の農業、鉱山業を営みながら越前電気株式会社取締役を勤めていた。同じく取締役の樫尾慶三（1880-?）、監査役の樫尾祐治(1888-?)はそれぞれ弟である。
　実はこの大蓄以前にも、樫尾兄弟が経営する朝日合資会社という企業が存在した。その登記情報は次の通りである。

●合資会社設立〇商号朝日合資会社〇本店大阪市北区東野田町百五番地〇目的汽機汽鑵各種ノ機械其他発見品ノ製造販売建築土工等ノ請負諸材料ノ供給并ニ一般鉄工業ヲ営ム〇明治四拾四年拾月拾五日〇存立設立ノ日ヨリ向フ満参拾ヶ年〇社員ノ氏名住所出資ノ種類価格及ヒ責任金壱万円有限福井県南條郡神山村松森第弐拾四号九番地樫尾長右衛門金五千円無限大阪市北区東野田町百五番地樫尾慶三金五千円無限同所垣内精八〇代表社員樫尾慶三　右明治四拾四年拾月弐拾五日登記（商業登記公告『大阪朝日新聞』朝刊、明治 44(1911)年 10 月 28 日、p.10）

　これによれば朝日合資会社は樫尾慶三を代表とし、蒸機機関（汽機）やボイラー（汽灌）等の製造販売およびこれらの設置工事の請負や材料の販売、さらに一般の鉄工所としての業務も行う企業のようである。後に社員の垣内精八は退社し、垣内の出資分を樫尾慶三が引き継ぎ自身の出資金を金壱万円とした（商業登記公告『大阪朝日新聞』朝刊、明治 45(1912)年 3 月 27 日、p.10）。会社設立当初の同社はレコードとは関係のない企業のように見えるが、設立からわずか 1 年足らずで、その営業内容から汽機汽灌製造等の項目が消え、新に蓄音機器音譜盤等の製造販売が加わった。

●朝日合資会社〇目的ヲ蓄音機器音譜盤并二之レカ附属品、諸器械ノ製造販売及一般鉄工業ヲ経営スルヲ目的トスト変更〇社員樫尾長右衛門ハ更二金弐万五千円ヲ出資シ其出資額ヲ金参万五千円ト変更〇大阪市北区東野田町百五番地樫尾祐治ハ金五千円出資シ有限責任社員トシテ入社　右明治四拾五年六月弐拾八日登記（商業登記公告『大阪朝日新聞』朝刊、明治 45(1912)年 7 月 1 日、p.12）

　現在のところ朝日合資会社がいつまで存続したかは確認出来ていないが、レコード会社としての体制が整った時点で解散し、大蓄へと発展したと考えるのが妥当ではないだろうか。この段階で樫尾長右衛門が出資金を増額し、後に大蓄の監査役となる弟の祐治が有限責任社員として入社していることからも、完全にレコード製造へ業種をシフトしたことが伺える。ただ前記の『蓄音器世界　第 5 巻 6 月号』の表紙にあるように、白熊印は「明治四拾弐年ヨリ製造」となっていて、これは朝日合資会社の設立より 2 年前である。同社以前に樫尾慶三が個人経営のかたちでレコード製造業を営んでいた可能性もあるし、明治 42 年からレコード製造をしていた全く別の企業を朝日合資会社が買収し、自社の営業項目に加えたとも考えられる。今後の調査の課題としたい。
　大蓄の会社設立は大正元年だが、活発に正規盤を発売するのは大正 4(1915)年ごろからのように見受けられる。同社は大正 6(1917)年 11 月に東洋蓄音器合資会社と合併を締結するが、ナショナルレーベルはその後も存続し、大正 7(1918)年 12 月新譜がその最後となった。したがってナショナルレコードの正規盤が製造販売された期間は三年余りと短い。正規盤の枚数は 200 枚ほどで、そのため各曲種における録音の種類は決して多くない。ナショナルレコードの曲種は次の通りである。

〈謡曲〉〈都山流尺八〉〈薩摩琵琶〉〈筑前琵琶〉〈義太夫〉〈新内〉〈端唄・小唄〉〈歌舞伎〉〈新派劇〉〈喜歌劇〉〈宝塚少女歌劇〉〈琵琶劇〉〈落語〉〈浪花節〉〈萬歳〉〈活動講談〉〈源氏節〉〈書生節〉〈琉球俚謡〉等

　これらの中で最も力を入れていたのは久の家登美子の〈端唄・小唄〉で、当時一番の売れ筋であったことが伺える。また大正 3(1914)年に始まった宝塚少女歌劇の歌声をいち早くレコード化したのはナショナルレコードで、初代中村鴈治郎の歌舞伎や、成美団の新派、連鎖劇の山崎長之輔、宮崎旭城らの琵琶劇、三笠萬里子らの演劇、神長瞭月の書生節など、当時の道頓堀を初めとする大阪の興行街で人気を博した芸能を他社に先駆けてレコード化していることも注目される。また変わったところでは 20 枚の琉球俚謡のレコードがある。これは大蓄技術陣が大正 4(1915)年に現地へ出張録音に出向き実現された（この琉球譜の制作に関しては、高橋美樹「レコードに初めて録音された沖縄音楽―1915 年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して―」『高知大学教育学部研究報告　第 71 号』2011、p.229-242　に詳しい）。
　ナショナルレコードの特徴はレコード盤の品質が非常に良いことである。録音が明瞭なことに加えて材質が良いためノイズが少なく、しっかりプレスされていて堅牢である。これは同社の複写盤においても同じで、同時期のニッポノホン、オリエント、東京れこをど、スピンクス等と比べても優れている。このことは樫尾慶三が代表だった朝日合資会社が鉄工業だったことが大

きく関係していると考えられる。同社が取り扱った蒸機機関やボイラー等の製造技術は、SP レコードの製造工程におけるレコード盤のプレスや材料の混合・加熱の技術などにも通じるものである。また工場の工作機械の設備が充実していても不思議ではなく、こういった技術の蓄積がナショナルレコードの製造にも大きく反映され、同業他社の製品と品質に於いては一線を画した理由ではないだろうか。

ナショナルレコードのレコード番号は A に続く 3 ケタの数字で（前記の琉球俚謡譜のレコード番号はアルファベットの 0 に続く 1～40)、基本的には表面の数字に対し裏面は１プラスになる（例：A145／A146)。ただこのパターンは大正 7 年 5 月新譜の「A435／A436」までで、A437 以降は「A437-A／A437-B」というように、表裏を数字に続く A・B で表すようになった。

前記の通りナショナルレコードとオリエントレコードは合併するが、ナショナルの旧譜のいくつかはオリエントからも再発売された。その際のレコード番号はナショナルの番号の A を 2 に置き換え、「A234／A235→2234／2235」という風に書き換えられた。

当該研究では前記琉球譜 20 枚を含むナショナルレコード正規盤 210 枚のディスコグラフィを作成した。

（２） ラクダ印オリエントレコード（日蓄オリエント）

ラクダ印オリエントは明治 40 年代から続く京都のレーベルで、その製造元は東洋蓄音器商会、東洋蓄音器株式会社、東洋蓄音器合資会社と移り変わり（東洋蓄時代)、大正 8(1919)年 11 月末に東洋蓄音器合資会社が株式会社日本蓄音器商会と合併し日本蓄音器商会京都分工場（オリエント工場）となったが、その後もオリエントレーベルは続いた。日蓄オリエントというのは合併後の大正 8 年 12 月新譜以降のオリエントレコードを指す。

日蓄オリエントレコードの特徴は大衆向きの曲種に強みを発揮したことで、鼈甲齋虎丸や吉田奈良丸、吉田一若の浪花節、立花家花橘や笑福亭枝鶴の落語、砂川捨丸の萬歳、伍東宏郎や泉詩郎の映画説明、鳥取春陽や横尾晩秋の書生節、山村豊子や南地金龍の端唄小唄などがよく売れたようだ。また大正・昭和初期の映画はサイレントで、観客は映画俳優の声を知らなかった。そのため映画出演者の演技を録音した「映画劇」という新たなジャンルが大正 10 年頃に生まれるが、日蓄オリエントがその嚆矢だったといえる。一方で井上嘉一郎や林喜右衛門の謡曲レコードが充実しているのは、謡文化が盛んだった京都らしい一面を示しいていて興味深い。

日蓄オリエントレコードを製造した日本蓄音器商会京都分工場は昭和 4(1929)年 3 月に閉鎖され、オリエントレコードの製造は日本蓄音器商会川崎工場に移管された。そして昭和 8(1933)年１月のコロムビアの廉価盤レーベル・リーガルレコードの発売に伴い、オリエントレーベルは昭和 7(1932)年 11 月新譜を最後に廃止された。ただオリエントレコードに残された多くの音源は、同じ傍系レーベルのヒコーキレコードやイーグルレコードの音源と共に、数多くリーガルレコードとして再発売された。

当該研究では大正 8 年 12 月～昭和 7 年 11 月のオリエントレコード計 3873 枚のディスコグラフィを作成した。報告者はすでに「東洋蓄音器（オリエントレコード）の社史調査とディスコグラフィの作成（基盤研究(C)、研究課題番号：24520168)」において大正 2(1913)年 2 月～大正 8 年 11 月のオリエントレコードのディスコグラフィを作成したが、今回の研究成果を併せることで、オリエントレコードの全貌をほぼ明らかに出来たといえる。ただ大正 10(1921)年の日蓄オリエントは新聞・雑誌広告等への露出がなく、新譜情報を十分に集められなかった。そのため大正 10 年発売分については満足な成果を得られたとは言えない。今後の課題としたい。

（３） ツバメ印ニットーレコード

ツバメ印ニットーレコードは大阪・住吉に本社を構えた日東蓄音器株式会社のレーベルである。同社は大正 9(1920)年 3 月に設立された純国産資本の企業で、その設立に関する登記情報は次の通りである。

●株式会社設立○商号、日東蓄音器株式会社○本店、大阪府東成郡墨江村大字上住吉百六拾四番地○目的、蓄音器及蓄音器音譜盤ノ製造販売併附帯事業一切○設立、大正九年参月弐日○資本総額、金五十万円○壱株、金五拾円○各株ノ払込額、金拾弐円五拾銭○公告方法、本社店頭二掲載ス○取締役、大阪市東区瓦町壱丁目参番地白山清太郎、大阪府東成郡住吉村九百四拾六番地福井発太郎、同村字大帝塚四百八拾番地ノ九勝田忠一、同郡墨江村大字上住吉百六拾四番地森下辰之助、同村大字浜口四百弐番地ノ参阿辺勝次郎○監査役、同村大字千躰拾番地井原栄治、同村西成郡粉浜村四百八拾参番地茂木長一、大阪市西区江戸堀南通弐丁目拾番地武田吉次○会社ヲ代表スベキ取締役、白山清太郎、森下辰之助（商業登記公告『大阪朝日新聞』朝刊、大正 9(1920)年 4 月 23 日、p.6）

社長の白山清太郎（1884-1950)は土地建物管理の白山殖産株式会社の代表。白山家は大阪の津守新田を代々経営した素封家で、当主は善五郎を名乗った。清太郎はその 6 代目で白山殖産(株)と木津川土地運河株式会社を設立し、津守新田の土地のほとんどを両社の所有とし、津守地域の

工業化を図ったとされる。また専務の森下辰之助（1881-1938?）は重役でありながらプロデューサーとしても敏腕を振るった。

義太夫節の熱心な愛好家で、自身も素人義太夫の大物であった森下は、当時文楽の中堅太夫の有望株だった二代目豊竹古靭太夫を起用し、大正 10 年 4 月のニットーレコード第一回発売には古靭太夫・三代目鶴澤清六コンビの「寺小屋」11 枚組と「御所桜」9 枚組を同時発売した。そしてその後も古靭太夫や豊竹駒太夫の一段丸ごとの義太夫節レコードは同社の看板商品として立て続けに発売された。また義太夫節以外にも当時ニットーのライバルだったワシ印ニッポノホンが実現できなかった五代目清元延寿太夫の清元や四代目吉住小三郎・三代目杵屋六四郎の長唄、六代目尾上菊五郎の歌舞伎、あるいは観世流宗家観世左近の番謡などをレコード化した。またクラシックの分野でも邦人あるいは来日演奏家達が多くの録音を残した。これらの他に類を見ない貴重な録音を数多く残した同社の功績は非常に大きいといえる。同時に落語や浪花節、端唄・小唄や映画説明や書生節といった大衆受けする曲種も充実していたことはいうまでもない。ただこのような義太夫節一段まるごとというような企画は、同社の経営を圧迫したようにも見受けられる。

ニットーは大正 15(1926)年 11 月～昭和 3(1928)年 1 月に 63 種 77 枚の「長時間レコード」を発売した。通常のレコードは角速度一定の録音方式で、10 インチ盤で 3 分前後、12 インチ盤で 4～5 分の録音が可能だが、長時間レコードは線速度一定という録音方式で、12 インチ盤に 10～12 分の録音が可能な画期的なレコードだった。ただ専用の蓄音器やアダプターが必要だったことや、間もなく始まったマイクロホン録音に対応できなかったことなどから、この方式は普及せず結果的に失敗に終わった。この結果を踏まえてかどうかは不詳だが、設立以来ニットーレコードを牽引した森下専務は、病気療養を理由に昭和 2(1927)年 9 月に同社を退社した。

昭和になりマイクロホン録音が一般的になった頃、新に生まれたジャンルに「流行歌」がある。森下退社後のニットーは、すでにかつてのような三味線音楽の意欲的な商品化からは遠ざかっていたが、「流行歌」中心の時流にも乗り遅れた感があるのは否めない。新に生まれたビクターやコロムビアが次々と流行歌の大ヒットを生み出す中、ニットーも東海林太郎、丸山和歌子、黒田進、美ち奴、松島詩子、林伊佐緒らを起用し新曲を送り続けたが、いずれも大ヒットには至らなかった。ただ桂春団治や三遊亭金馬の落語やエンタツアチャコの漫才、広沢虎造や梅中軒鶯童、酒井雲、宮川左近らの浪花節といった演芸のジャンルは売れ筋で、同社の経営を支えたといえる。

昭和期のニットーレコードで注目されるのはジャズソングの佳盤が多く見られることである。二村定一、天野喜久代、井上起久子、内海一郎などをいち早く起用し、篠原正雄や江口夜詩や服部一郎を制作陣として、戦前日本におけるジャズ受容史の縮図のような作品を生み出した。その流れの結実が昭和 9(1934)年 11 月の日本クリスタル蓄音器合資会社の設立である。ドイツおよびイギリスのクリスタレート原盤による洋楽レコードを発売し、昭和 10(1935)年 5 月には国内録音の邦楽盤も発売した。しかしこれらも爆発的なヒットには繋がらなかったようだ。

昭和 10(1935)年 11 月、日東蓄音器株式会社は兵庫県西宮市の太平蓄音器株式会社に吸収されるかたちで合併し、新に大日本蓄音器株式会社が生まれた。同社の主力はタイヘイレーベルで、ニットーレーベルはその後も続くが、昭和 13(1938)年にはついに廃止された。

当該研究では大正 10 年 4 月～昭和 10 年 12 月のニットーレコード 6401 枚、併せてニットー長時間レコード 77 枚、日東蓄音器の子会社として設立された日本クリスタルレコード 79 枚の計 6557 枚のディスコグラフィを作成した。なお昭和 11(1936)年 1 月新譜以降のニットーレコード、並びにニットー大衆盤については、現在進行中の「内外・タイヘイレコードのディスコグラフィ作成（基盤研究(C)　課題番号：21K00214）」に反映させたい。

〈引用文献〉

① 岡田則夫、続・蒐集奇譚　13、レコード・コレクターズ 10 月号、1991、ミュージックマガジン社
② 毛利眞人、ツバメ印のジャズソング、The LOST WORLD of JAZZ 1928-1936 CD 解説書、2022、ぐらもくらぶ

（４）成果報告の方法

当該研究の研究成果である３点のディスコグラフィは、京都市立芸術大学リポジトリにて Web 公開の予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 大西秀紀	４．巻 5
２．論文標題 砂川捨丸のSPレコード―府立上方演芸資料館所蔵盤について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大阪府立上方演芸資料館 令和２年年度年報	６．最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大西秀紀	４．巻 17
２．論文標題 古曲保存会制作レコードとその周辺	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本伝統音楽研究	６．最初と最後の頁 37-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大西秀紀	４．巻 4
２．論文標題 浪花節のニットー長時間レコード	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大阪府立上方演芸資料館、令和元年度年報	６．最初と最後の頁 37-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大西秀紀	４．巻 3
２．論文標題 演芸関係のＳＰレコード文献資料について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪府立上方演芸資料館 平成30年度年報	６．最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大西秀紀	4．巻 35
2．論文標題 先代竹本錣太夫のレコード	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立文楽劇場 第157回、開場35周年記念 文楽公演プログラム	6．最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西秀紀	4．巻 2
2．論文標題 楽語荘発行のレコード	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大阪府立上方演芸資料館 平成29年度年報	6．最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大西秀紀	4．巻 21
2．論文標題 二世豊竹古靱太夫（山城少掾）の「摂州合邦辻」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 舞台芸術	6．最初と最後の頁 109-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大西秀紀	4．巻 218
2．論文標題 京都のレコード会社 東洋蓄音器・オリエントレコードについて（発表要旨）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 藝能史研究	6．最初と最後の頁 84-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 大西秀紀
２．発表標題 音で聴く砂川捨丸の世界～大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）の収蔵資料から
３．学会等名 大阪府立上方演芸資料館（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 大西秀紀
２．発表標題 京都のレコード会社　東洋蓄音器（オリエントレコード）について
３．学会等名 第94回 国際ＡＲＣセミナー（Web配信）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 大西秀紀
２．発表標題 大阪の声と唄 二代目三木助のレコードを中心に
３．学会等名 大阪芸能懇話会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大西秀紀
２．発表標題 五代目笑福亭松鶴の天王寺詣り
３．学会等名 大阪芸能懇話会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大西秀紀
２．発表標題 コロムビア大広告塔の出来るまで
３．学会等名 大阪芸能懇話会
４．発表年 2018年

１．発表者名 大西秀紀
２．発表標題 町田佳聲と古曲保存会レコード
３．学会等名 2017年前記でんおん講座Ｆ　三味線音楽研究―町田佳聲をめぐって
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 大西秀紀	４．発行年 2020年
２．出版社 森話社	５．総ページ数 363
３．書名 演劇とメディアの20世紀（近代日本演劇の記憶と文化８）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

東洋蓄音器（ オリエントレコード） の社史調査とディスコグラフィの作成 http://id.nii.ac.jp/1290/00000126/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関